保健体育教育における
「教科教育学」と「教科専門」を統合した大学院教育の在り方の検討

◎鈴木　秀人、○佐見由紀子　（東京学芸大学教職大学院・保健体育教育サブプログラム）
鈴木　聡、佐藤善人、鈴木直樹（東京学芸大学健康・スポーツ科学講座 体育科教育学）
繁田　進、及川　研、高橋宏文、仲宗根森敦（同上　運動学）
神戸　周、鈴木明哲（同上　体育学）
代表者連絡先：hidetos@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】大学院教育、教科教育学、教科専門

1　はじめに

実技を中心とした体育では、授業実践で求められる教師の資質・能力が示範できる実技能力や、運動技術習得のためのハウツー的指導法の知識に矮小化されることが多い。また、保健においては、重要事項の羅列的提示に終始している授業実態が見られ、授業実践に必要となる教師の資質・能力が改めて問われることも少ないといった問題状況がある。

こういった現状を改善し、学校教育現場における実践および研究の中心となる人材を育成していくことは、教員養成大学における大学院が担う大切な役割である。

2　本プロジェクトの目的

本プロジェクトは、こういった現状を改善していく上で有効な大学院教育の在り方を探りながら進めてきた、初年度から2年間にわたる教職大学院の授業をいったん振り返り、その成果と課題を踏まえつつ、さらにそのよりよい在り方を検討することを目的とした。

そこでは、大学院教育がしばしば批判されてきた教科教育学と教科専門の乖離を克服し、その両者の統合を基盤とした大学院における教育を構築するという視点を引き続き意識しながら、ティーム・ティーチング等の授業方法も含めた検討を進めていった。

3　本プロジェクトの内容

保健体育教育サブプログラム開講科目で、教科教育学が専門の教職大学院専任教員２名（鈴木秀・佐見）と教科専門である運動学が専門の兼任教員２名（高橋・繁田）がティーム・ティーチングで行う「内容構成開発と実践Ａ」の授業を例に、取り組みの内容を紹介する。

(1)　これまでの授業の振り返り

高橋はバレーボール、繁田は陸上競技を研究対象としている。教職大学院の初年度においては、常に授業実践を念頭におきながら、高橋と繁田にそれぞれ３回、バレーボールと陸上競技について論じてもらい、それを受けて現職院生も含む院生が毎回議論を行うという形で授業を進めた。毎回の議論は活発に行われたものの、議論の焦点が定まらないまま、その内容は拡散してしまうことも多く、また、教科専門の教員は授業実践との結びつきを意識するあまり、自身の研究成果よりも、無理に授業実践に関連した話題を取り上げてしまうことも見られた。教科教育学の立場から見ると、教科専門教員の授業への関わり方に言わば窮屈そうな印象も受けた。

授業は、教科専門の教員担当の３回が終わると、そこで学んだことの振り返りをレポートにま

とめる形で行い、それを相互に発表し合ってまた議論した。そこで出た意見の中に、もっと教科専門からの話を聞きたい、議論ではなく教科専門の立場からの知見を学びたい、といったものが複数見られた。そういった院生からの反応も踏まえ、昨年度には、教科専門教員担当の授業回数を５回に増やし、また、そこで取り上げる内容は授業実践と直接関わらなくてもよいので、これまでの研究成果を自由に取り上げてもらうように依頼した。

(2) 授業の概要

授業計画は、第１回：バレーボールの実践をめぐる問題提起（鈴木秀）⇒第２回～６回：運動学の立場からのバレーボールに関する話題提供とそれを受けての議論（高橋）⇒学んだことについてのレポート作成とウェッブでの共有⇒第７回：各自のレポート発表と議論⇒第８回：陸上運動・陸上競技の実践をめぐる問題提起（鈴木秀）⇒第９回～13 回：運動学の立場からの陸上運動・陸上競技に関する話題提供とそれを受けての議論（繁田）⇒学んだことについてのレポート作成とウェッブでの共有⇒第 14 回：各自のレポート発表と議論⇒第 15 回：総括レポートの作成、というものであり、バレーボールに焦点を当てた前半７回と、陸上運動・陸上競技に焦点を当てた後半７回の授業構成は同じである。

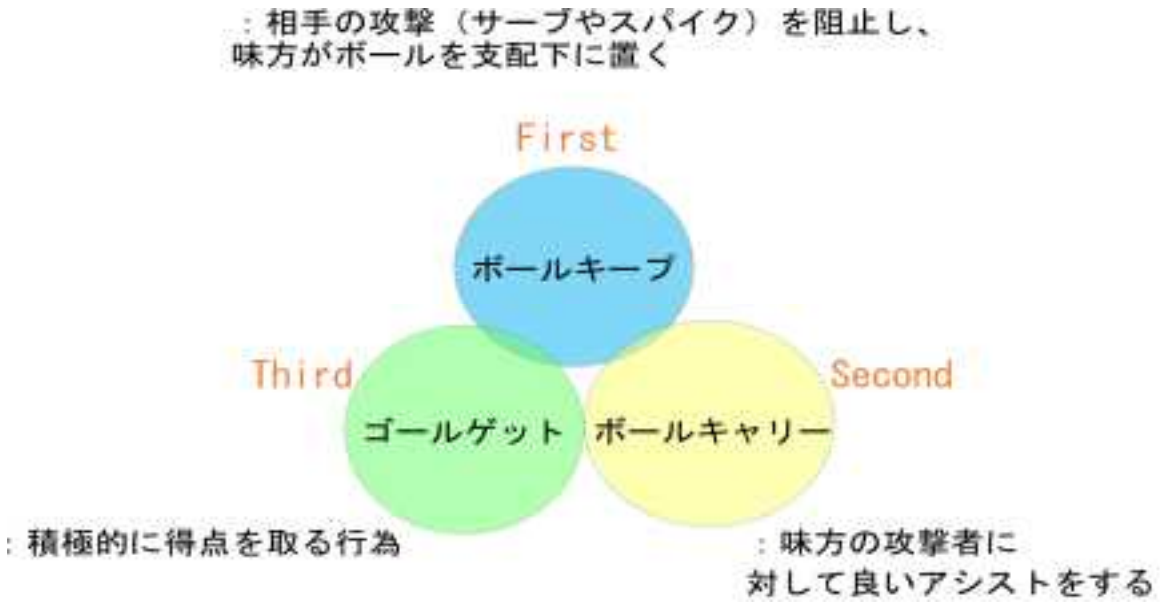
第１回の授業では、体育科教育学の立場からの問題提起が行われた。小学校におけるソフトバレーボールも含め、バレーボールは体育授業で取り上げられているボールゲームの中で最も授業がうまくいっていない種目であること、それゆえ、教育現場ではキャッチ OK やワンバウンド OK といったルールの工夫が様々に行われていること、しかしながらそれらの工夫はバレーボールの本質を検討した上での工夫ではなくて、目の前の子ども達にとって技術的に難しい面を排除したり緩和したりすることに主眼があること、そういったルールの工夫がどのような問題を引き起こしていると考えられるのか等々について、実際の授業映像も提示しながら提起した。

また、授業開始前にタグラグビー、バスケットボール、バレーボールのルールの工夫について、その種目の成立・発展過程の歴史から見るとどのように論じられるのかを考察した論文をウェッブで配布し、それぞれの種目の本質を議論する際にはその発生にまで立ち返って考えるというスタンスを持つように促した。

(3) 教科専門（運動学）からの話題提供①－バレーボール

体育科教育学の立場から行われた第１回の問題提起を受け、運動学の立場から最新の研究成果を踏まえた話題提供が５回にわたって行われた。そこでは先ず、このゲームの発生から初期のレクリエーショナルなゲームの様相が紹介され、それが現在のような姿へいつ頃、どのように変容していったのかが写真や映像によって示され、院生達はそれらを知識として共有した。世界各国への普及の中で、日本の紡績工場の女子工員への普及や、社会主義国へ普及した理由といった話題は、このゲームが持つ特質を理解していく上で示唆に富むものであった。

そのような歴史的経緯の理解の次に、現在のような高速化したゲームにおける「三段攻撃」の意味の説明が行われた。下図はその際に使われたスライドである。



これによれば、バレーボールの「三段攻撃」には、まさに３つの段階それぞれの意味があることがわかる。議論は、こういったプレーがまだできない段階の体育授業でのレベルに関するものから、トップレベルの競技の世界に関するものまで、幅広く活発に展開された。そのような議論を経て、院生が学んだことについてまとめたレポートの一部を紹介する。

> プレーの構造として、ボールゲット、ボールキープ、ゴールゲットがあることがわかった。このことは、子どもが学習を進める上での中心課題になると感じた。
> この構造についての学習課題を、発達段階に応じて子どもに提示することで、子どもが意欲的に追究していく学習が実現できると考えた。

ここでは、単なる技術の練習を超え、学習する内容についての意味を考えていることがうかがえる。体育では、ある運動技術を教師がその意味も十分に考えることもなく子ども達に練習させようとする状況も見られる。バレーボールでは、「三段攻撃」の練習がその典型とも言える。そういった授業を再考するきっかけをここでは提供できたのではないだろうか。
また、次のようなレポートも見られた。

> バレーボールの歴史を学ぶ中で、「考案当初はボールをつなぐことを楽しんでいた」という事実を知った。
> 触球回数に制限はなかったという。とても興味深かった。バレーボールの本来の魅力がそこにあることが分かった。
> ボールをつかまず、落とさず、なんとか相手コートに返すという運動の魅力に人々は誘い込まれるのではないだろうか。
> となると、私がこれまで行っていたキャッチバレーボールの実践を見直す必要がありそうだ。

このような現職院生からの意見があった一方、他の現職院生からは次のような意見が出された。

> 本授業で、バレーボールが「Volley Ball」であることを認識した。これはバレーボールとカタカナ表記では気づきづらいのだが、英語表記すると「Volley」、つまり「ボールが地面に落ちる前に触る」ということに初めて気づいたということである。
> 小学校の体育ではワンバウンドを許容することもある。とすると、本来のバレーボールとは異なる運動になるのではないかという疑問がわいた。
> 一方で、レクリエーションに端を発する種目だということも学び、「それならば楽しむためにルールを簡易化することも可能なのか」とも考えた。
> 歴史や成り立ち、変遷を知ることで、どのような視点で授業にルールの工夫を取り入れるべきかを考えることができるようになった。

ここには、それまでは種目の歴史についての知識などなく、その種目の本質がどこにあるのかを考えることもなく、ただ「三段攻撃」を小学生でもできるようにと取り入れていた「キャッチ OK」や「ワンバウンド OK」という、これまで自身が行ってきたルールの工夫に疑問を抱くようになったことがわかる。運動学の立場からは、そのどちらが正しいといった説明は一切ない中で、授業実践において自身が行う指導方法を導く明確な根拠を持つ必要性に目を向けるようになったのである。

（4）教科専門（運動学）からの話題提供②－陸上運動・陸上競技

第８回の授業で体育科教育学の立場から行われた問題提起は、持久走ないしはマラソンと呼ばれている陸上運動に位置づく実践は、体育授業で最も不人気な種目であること、それは、教師が学習指導要領解説が言う「動きを持続する能力を高めるための運動」として教えていることに大きな原因があること、学校教育の場では不人気なこの運動も、学校の外の社会においては多くの人が愛好するジョギングやランニングという人気種目であること等々について、バレーボールと同じく実際の授業映像も提示しながら提起した。

この問題提起を受け、運動学の立場からの話題提供が５回にわたって行われた。そこでは先ず、この種目の起源とも言える古代オリンピックの話から始まり、それが近代オリンピックへどのよう

に継承され、その後トップレベルの競技の世界で開発された運動技術の例として、走り高跳びの「背面跳び」が映像を交えて紹介された。それらの知識を共有した後、ハードル走、走り高跳び、投擲競技などに関する学術論文の講読を行って、様々な議論が行われた。

特に、下の写真左のように、ハードルはできるだけ「低くまたぎ越してぬき足は横にぬく」とい

うこれまでの教え方は必ずしも適切ではなく、むしろ写真右のように「高く跳び越して足は縦にぬく」という教え方がよいとする最近の研究をまとめた論文は、多くの院生に衝撃を与えた。

この論文をテーマにした議論の後、現職の院生は以下のようなレポートを書いている。

> 私は、「スポーツの最新」を知り、授業に活かすという課題を設定することができた。
> ハードル走の縦抜き抜き足の例がそれである。
> 様々な競技の最新を知り、自分自身の実践を発展させていきたい。

もちろん、ここで言う「スポーツの最新」とはスポーツに関する最新の研究成果ということである。このハードル走の研究論文は体育科教育学の立場ではなく、運動学の立場からハードル走を研究してきた研究者によって書かれたものだったが、このように教科専門の世界で積み重ねられている研究の中にも、教育現場の教師に受け入れられやすい内容のものもある。

一方、これだけオンラインで多様な情報が容易に入手できる環境であるにも拘わらず、教育実践の現場にはそれが届いていない現実もある。今回授業で取り上げられたハードル走の研究論文は公表されてから 10 年余が過ぎているが、その間に目にした教育現場でのハードル走の実践報告に、この論文が参考文献として上げられているのをほとんど見たことがない。実践報告の参考文献の大半は、学習指導要領解説やそれに準ずるいわゆるハウツー本の類である。

教職大学院の授業は、そういったレベルを超えた学術研究の成果を実践の場へ還元していく役割を果たしていくべきであり、安易に実践の具体ばかりを論じるような場にすべきではないということが、改めて認識された次第である。

4　成果と課題

これまでに報告してきたような大学院教育の取り組みの結果、保健体育サブプログラムでは 1 年履修の現職院生を除き全員に執筆を課している専門学術論文に、多様なテーマの研究が見られるようになっている。

それには、例えば「高等学校の健康教育におけるコミュニケーションスキルを高めるための授業」といった、教育実践に極めて近い授業研究があり、また「体育科校内研究会における教師の学びに関する研究」というような実践のための理論的研究があり、さらには「1960 年代における女性とスポーツの関係に関する考察」といった、教授-学習過程の前提条件に関わる基礎的研究もある。

数として最も多いのは、体育でも保健でも教育実践に直接関連する授業研究であるが、そればかりではないところに、教科専門との繋がりを大切にした取り組みの成果が見えるのではないだろうか。引き続き今回のような取り組みを繰り返しながら、教科教育学と教科専門を統合した大学院教育のよりよい在り方を探究していきたい。

コロナ禍により、当初計画した他の教職大学院における授業の観察や担当教員からの聞き取り調査は断念せざるをえなかったので、これは今後の課題として残された。